# 魔王の胎動

## ～正義のエージェントNTR催眠調教～

目次

プロローグ
第一章　捕縛
第二章　催眠調教
第三章　フェラチオ調教
第四章　痴漢調教

# プロローグ

都内某所。誰も近づきそうもない薄汚れたＢＡＲで、二人の男があからさまに怪しい会話をしていた。

「今日はこちらをお願いしたい」

スーツ姿の男の一人が一枚のメモを取り出す。そこには小さな文字でいくつかの事柄が羅列されていた。

「ほう。選挙工作ですかい。これまた地味なことですね。異世界から来たという『アラクラン』なら本気を出せばこんな裏工作しなくともこの世界を思い通りにできるでしょうに」

「今はまだダメだ。魔法少女という厄介な存在がいる。それにその魔法少女を手助けしている『ＭＧＯ（魔法少女機構）』もな」

「『ＭＧＯ』……。魔法少女だけならともかく、この組織ができてから本当にやりづらくなりましたよね。それまでは俺たちのような『アラクラン』の下部組織でもいい思いができたっていうのに。まったく、何が正義の魔法少女だ」

「それももう少しの辛抱だ。この選挙で我々の擁立する候補者が当選すれば『ＭＧＯ』という組織の縮小……。あわよくば解散にまで持ち込めるかもしれない」

「それはほんとですかい。そうとわかれば気合が入るってもんですぜ」

「では、受けてくれるな」

「もちろんです。それで、代金のほうは……」

「今お前たちの口座に振り込ませた。足りなくなったら言え。ある程度は融通してやる」

「へへへっ、ありがとうございます」

闇取引。間違いなく違法な取引がこの場で行われていた。しかし、それを咎めるものは誰もいない。男たちは誰にも知られることなく、この危険な取引を完了した。そう思っていたのだが――。

バーンッと店のドアが蹴破られる。それと同時に武装した部隊が侵入してきた。その部隊の隊員の背中には大きく白抜きで『ＭＧＯ』と書かれていた。

「『ＭＧＯ』だっ！　手をあげろっ！」

「なっ！　ど、どうしてここがバレた」

「……っ、また『ＭＧＯ』か」

男が懐から拳銃を取り出そうとしたが、その前に動き出した『ＭＧＯ』の隊員が男たちを取り押さえる。男たちは何もできないまま逮捕されることになったのだ。

「『ＭＧＯ』の調査能力を舐めるな。お前たちがどこで何をやっていても我々のエージェントがすべて調べ上げてお見通しだ」

「くそっ！」

こうして悪の組織『アラクラン』の悪だくみの一つがここに潰えた。

だが、これは終焉ではない。むしろ始まりであった。

正義の組織『ＭＧＯ』と悪の組織『アラクラン』の果てしない戦いの――。

# 第一章　捕縛

都内の某私立学校から生徒たちが退出していく。部活動に向かう者もいるが、そのまま帰宅する生徒も多いようだ。その中の一人に、ひときわ輝くような美貌を持った女生徒がいた。

「ケイ、待ってよ」

ケイと呼ばれた女生徒が振り向く。彼女の名前は天花寺ケイ（てんげいじ　けい）。この学校でも一、二を争うほどの美少女だと言われている。そんな多くの男子生徒にとって高嶺の花とも言えるケイに、気軽に話しかけてくる男がいた。

「タクミか」

海老原タクミ（えびはら　たくみ）。ケイとは幼なじみであり、恋人でもあった。しかしまだセックスはしていない。二人とも今時珍しく学生らしい清い交際をしているのである。

「一人で帰っちゃうなんてひどいよ。せっかくなんだから一緒に帰ろうよ」

「悪いが、急ぎの用があるんだ。放課後デートならまた今度にしてくれ」

「えーっ、そんなぁ」

タクミは残念そうに目を伏せる。首をたれてテストで赤点でもとった時のようだった。そんな様子を見てケイも胸が痛むのか、先ほどまでの凛とした表情が少し崩れた。

「いつものバイトだ。もし早く終わったら一緒に夕食でも食べよう。それでいいか?」

「えっ、本当? もちろんっ! やったぁ、楽しみだなぁ。ケイと夕食」

「早く終わったら、だ。そこを理解しているのか?」

「してるしてる。だからバイトが終わったらすぐにメッセちょうだいよ」

「了解した」

大人っぽい雰囲気のケイに対してタクミはまだまだ子供のようだった。しかし、ケイはそれを嫌がっている様子はない。むしろそんなタクミの子供っぽさを愛でているようでもあった。

「ああ、でもカナデも一緒でいいかな？　ほら、一人で夕食ってのも可哀そうだし」

カナデとはタクミの妹である。ケイにもよくなついていてケイにとっても妹のような存在だ。タクミの申し出を断るはずがなかった。

「もちろん最初からそのつもりだ。カナデにも伝えておいてくれ」

「さすがケイだね。僕たちのことをよくわかってる」

「もう何年も一緒にいるからな」

幼なじみから恋人になるとはこういうことなのかもしれない。家族としての役割が変わるわけでもない。変わったのは二人の気持ちだけなのだろうか。しかし、それでもいいと二人は思っていた。

何とも若い恋人だった。

ケイのバイトというのは普通のバイトではない。『ＭＧＯ』の諜報員。つまりエージェントだった。もちろんこのことをタクミは知らない。タクミはケイのバイトをただのＮＧＯ団体で事務仕事をしていると思っている。確かに表向きはそうなっており、そのための仕事もしているのでまったくの嘘と言うわけではない。

そんなケイのスマホにいつものように指令が届いた。今回の標的は街はずれにある空き倉庫の調査。そこで昨晩闇取引があったという。現場に何か物的証拠などが残っていないか確認するという簡単な任務だった。

（危険性は少ないし、簡単に終わりそうだ。これならタクミとの夕食もいけるかもしれない。よかった）

素っ気ない態度をしていたが、これでもケイはタクミのことを愛している。やはりタクミとの夕食デートは楽しみで仕方がないのだ。できれば任務のことなど放っておいてデートを優先したいくらいだが、責任感の強いケイにそれはできなかった。

現場に着いてみるとどこにでもありそうな古い倉庫だった。だからこそこういう場所は闇取引の温床になりやすい。わざわざ目立つ場所で取引する馬鹿などいるはずがなかった。

（さて、『アラクラン』に関する証拠でも出てきてくれたらありがたいんだが……）

正義の『ＭＧＯ』のエージェントであるケイとしては、当然本命は『アラクラン』に関する情報を手に入れることだった。しかし、それ

以外でも構わない。悪を憎むという点ではケイほど正義感の強い女性も珍しいほどだ。犯罪に関することなら『アラクラン』に関わらず断罪するつもりである。

しかし、今回は想像以上の大物が網にかかったようだった。

（床下から風が――）

一見すると何もない空き倉庫のようだが、一回りしてみて一か所不自然に床下から風が吹いている場所があった。つまり地下に空間があるということだ。この手口はよく『アラクラン』の下部組織が使っているものである。今回も『アラクラン』が関与している可能性が高かった。

（私の仕事としてはもうこれを報告して終わりだな。危険なことは実行部隊に任せることにしよう）

ケイの仕事はあくまで先行調査である。ここに『アラクラン』の基地がある可能性を発見しただけで十分すぎるほどの仕事だった。個人的なことを言えばタクミとの夕食デートに早く行きたいということもある。

（さて、写真を撮って帰還を――）

スマホのカメラを床下に向けた瞬間、ケイはあるものに気づいた。そこにはよく見ると誰かのスマホが落ちている。しかも、そのカバーには見覚えがあった。

「まさかっ！」

ケイはそのスマホを手に取ってみる。間違いない。このスマホはタクミの妹であるカナデのものとまったく一緒だった。試しにカナデ宛てにメッセージを送ってみると、手に持っているカナデのものらしきスマホに反応があった。まず間違いないだろう。

（どうしてカナデのスマホがここに……？　偶然、なわけはない。まさか、カナデが事件に巻き込まれたか！？）

確認のためにタクミにメッセージを送ってみる。カナデは今家にいるかどうか。メッセージはすぐに帰ってきたが、それはケイが希望していた答えではなかった。

（カナデはまだ家に帰っていない。ということはカナデはここで何かあった可能性が高い……）

ケイは我慢ができなかった。カナデのスマホを制服のポケットにしまい、倉庫の床下の隙間に手をかけた。よく見るとそこだけ不自然に

ホコリがかぶっていないのでよくわかる。ガコンッという音とともに地下への入り口が開け放たれた。

「もしかしたら、この先にカナデが……」

ケイは『ＭＧＯ』に連絡することも忘れて単独で地下へと潜っていったのだった。

地下は想像以上に広い空間だった。『アラクラン』の基地の中でもかなりの大型ではないだろうか。それだけに大物の敵が存在している可能性も高かった。

（カナデ……っ！）

ケイはすぐに地下の一室でカナデを発見した。何やら妙な機械に磔にされており、ぐったりして意識はないようだ。表情が見えないだけに安否が心配される。

室内にはカナデ以外には誰もいない。助け出すなら今がチャンスだろう。ケイは手早く開錠するとカナデのいる部屋へと侵入した。

「カナデ、大丈夫か！？」

「う、うぅん……」

呼びかけにわずかだが反応があった。どうやら命に別状はないようだ。それだけでケイの胸は少しだけ軽くなる。

「今助けるから」

複雑な機械に拘束されていたが、解くのはそこまで難しくないようだった。エージェントとして特別な訓練を受けているケイにはなおさら簡単なことだっただろう。数分もするとカナデは完全に機械から解放された。

「カナデ、もう少し我慢してくれ。今外に出してやるから」

ケイがカナデを背負い、この地下から脱出しようとした、その時だった――。

ブスッとケイの首筋に何かが刺さった。強烈な痛みとともに何かを注入された感覚……。こんなことができる人物は一人しかない。

「か、カナデ……？」

倒れるケイとは反対にカナデは立ち上がっていた。その手にはいつの間にか注射器が握られている。カナデの表情には感情がなく、まるでロボットのようだった。

「ど、どうして……」

ケイはわけがわからないまま意識を闇の中へと沈ませていった。

ケイが倒れて数十分経過していた。ケイは先ほどとは別の部屋に運び込まれ、カナデが拘束されていたものと同じ機械に捕えられていた。頭にはVRのような機器が取り付けられ、四肢は金属の拘束具で動けないようにされている。そして首には太いメタリックな首輪がつけられていた。まるで奴隷が拘束されているかのようである。

「思った以上にうまくいったな」

そんなケイを眺める男が二人……。一人はいかにも科学者のような風貌で先ほどから電子機器をいじりながらケイの様子を確認している。そしてもう一人は腕を組んだままスーツ姿でじっとケイの顔を眺めたままだった。

「想定では戦闘も覚悟していましたからね。まさかあんな単純な罠にひっかかるとは思いませんでしたよ」

「偶然捕まえた人質がこいつの知り合いだったらしい。それで判断を誤ったんだろう」

「不運なやつですね」

「我々にとっては幸運だったがな」

このニ人はもちろん『アラクラン』の一員だった。腕を組んでいるスーツ姿の男がこの基地の責任者でフォレストと呼ばれている。そしてフォレストを補佐している科学者の男がバグというコードネームだ。

「では調教を始めようか。ここまで侵入してきたということは、こいつは確実に『MGO』のエージェントだ。うまくいけば『MGO』の情報を手に入れることができるかもしれない」

「ひひひっ、お任せを。壊れてもいいのなら今日一日ですべての情報を吐き出させることができますが?」

「いや、こいつには利用価値がある。できれば俺たちの手駒にしたい。できるか?」

「可能ですとも。しかし、そうなると少々工夫が必要ですが」

「任せる。俺もできる限り協力しよう。お前は当分こいつの担当でいい」

「ありがとうございます。では、意識を失っているうちに機械洗脳といきましょうか」

バグが手元の機械を操作する。ウィーンというモーター音とともにケイに接続された機械たちが動き出した。

「ん……。うぅん……」

「まずは表面的な情報を吸い出しましょう。荷物の中に学生証があったので名前はわかります。天花寺ケイというらしいですね」

「本名とは限るまい。学生というのも偽装の可能性もある。裏付けが欲しいな」

「それは後程本人に語らせましょう。ひとまずは天花寺ケイと呼ぶことにして実験をつづけます」

「わかった」

バグがさらに手元の機械をいじると様々な数値が画面に映し出された。その中にはケイ本人ですら知らないであろう数値も含まれている。

身長　一六四センチ

体重　五〇キロ

スリーサイズ　８７・５７・８９

バストサイズ　Ｅ

「肉体のデータはすぐに割り出せます。運動能力も高そうですね。やはり『MGO』のエージェントだからでしょうか、いい筋肉の付き方をしていますよ。肉体年齢と比べると学生証に記載されている年齢は一致するようです」

「それはいいな。手駒として使うならやはり優秀なほうがいい」

「肉体データの収集はこのへんにして、薬液の注入に入ります。同時に記憶操作に肉体改造……。このあたりは好きにしてもよろしいんですよね?」

「ああ、お前へのボーナス代わりだ。好きにしろ。ただし、壊すなよ」

「わかっています」

ケイのメタリックな首輪から首筋へ緑色の液体が注入される。ケイは一瞬「うっ」とうめき声をあげたが、薬で意識を失っているためか目覚めることはなかった。さらに四肢を拘束している器具からはビリビリと電撃が流れる。ケイの身体はピクピクと小刻みに痙攣した。

「ほう、もう下着が濡れてきたか」

椅子に蟹股になるように拘束されているため、ケイのパンティは丸見えだった。そのパンティにシミができてきたということは、ケイの肉体的には興奮しているということだ。たとえ意識を失っていても肉体の変化は止められるものではない。

「早いですね。この女は淫乱の素質があるかもしれませんよ」

「それはそれで面白い。ぜひともこいつの身体で遊んでみたいものだ」

「少し辛抱していただければいくらでも遊べるようにいたしますよ」

「頼りにしている」

二人が邪悪な会話をしている間にもケイは湿ったうめき声をあげていた。無意識なのだろうが、すでに肉体は機械による調教を受けている。その声に艶やかな色合いが出てきても仕方のないことだった。

「滑り出しは順調ですね。しばらくこの調子で肉体の感度をあげましょう。数時間で規定値を超える見込みです」

「ああ、任せる。それと昼間に捕まえたあの女――海老原カナデだったか？　あっちはもう完成したのか？」

「完成とまではいきませんが、ある程度の操作はできますよ。どうしたんですか？　あっちは『MGO』を釣るための餌だったはずですが」

「いや、そいつとこの女は知り合いのようだからな。うまくいけば面白いことができそうだと思ったんだ。一度カナデのほうは家に帰したいんだが、またここに戻ってくるように操作できるか？」

「お任せください。そのくらいならお安い御用です。しかし、いかがなさるので？」

「クククッ、無理やり調教するばかりでは面白くないと思ってな」

フォレストは邪悪な笑みを浮かべて艶めかしい姿のケイを眺めている。悪だくみをしていることは明白だろう。しかし、バグにとってはそんなフォレストがこの上なく頼もしい上司に思えたのだからしょうがない。

「今回の調教は楽しくなりそうですね」

「ああ、まったくだ」

ケイが気がつくとそこは自分のベッドの上だった。時刻は夜の十一時前。窓の外はもう真っ暗だ。

「あれ、私……。どうしてここに……？」

記憶を遡ってみる。今日は『ＭＧＯ』からスマホに指令が届き、街はずれの空き倉庫へと調査に向かった。そこで何か重要なものを――。いや、違う。何も見つけなかった。いくら探しても何も見つからないので、『ＭＧＯ』には異常なしと報告したのだ。その後帰りに偶然カナデと出会って一緒に帰宅した。そして帰ってくるなり急な睡魔に襲われたので着替えもせずにベッドで眠ってしまったというわけだ。ケイの記憶ではそうなっている。

「そんなに疲れてたのか、私は」

いつもならこの程度の任務容易くこなしていたはずなのだが、知らず知らずのうちに疲労がたまっていたのかもしれない。今日はもうお風呂に入ってすぐに寝てしまおうと思った。

着替えを持って風呂場に行くと手早く裸になる。シャワーの温度を確認して湯を全身に浴びた。

（気持ちいい……。やはり疲れがたまっていたようだな。これからはもっと体調管理にも気を遣わないと）

一流のエージェントであるケイはプロ意識も高い。ただの疲労とは思わずに休息も重要な任務の一つだと考えていた。

シャワーを浴びながら手で体を撫でていると、偶然指先が胸の先端——乳首をこすった。

「あんっ！」

ケイは自分のあげた声に驚いた。ただ手が乳首に触れただけだ。それなのに、この刺激は何だろう。今までこのような刺激はなかったはずだ。しかも、その刺激が気持ちいいものなのだからケイの狼狽も激しくなる。

（……どういうことだ？）

恐る恐る再び乳首を触ってみる。またしても強烈な刺激が全身を駆け巡った。それは甘美な響きとなって脳へと到達する。

「〜〜〜っ！」

気づくと乳首は完全に勃起しており、ピンと自分を主張するかのように巨大になっていた。

（私の乳首、こんなに大きかったか……？）

これ以上は触ってはいけないと脳のどこかから警報が鳴るが、脳の別の場所からは甘い好奇心が湧き上がってくる。もう一度、もう一度だけ触ってみよう。今度はもっと強く。

ケイは好奇心に抗えず勃起した乳首を強くつまんでみた。

「ああんっ！」

気持ちいい。自分の身体がこんなにも敏感になっていることをおかしいと思いながらも、身体の奥からにじみ出る欲望には逆らえなかった。

（乳首だけでこれなら、あそこを触ってみたらどうなるんだろうか……）

ケイの視線は乳首よりももっと下――クリトリスに集中していた。今までオナニーなど知識として知っていてもやろうとは考えたこともなかった。そんなことをしている暇があれば任務に集中するか、勉強でもしている方がマシだと思っていたからだ。しかし、今のケイは任務や勉強よりもオナニーのほうに興味が惹かれている。

（ちょっとだけ……。ちょっとだけだ……）

ケイは指先でやさしく皮の被ったクリトリスを触ってみた。たったそれだけで乳首以上の刺激がクリトリスから全身へと駆け巡ったのだ。

（なんだ、これ……っ！）

ケイは恐ろしくなった。これ以上乳首やクリトリスを触ってしまうと戻れないところまで進んでしまうかもしれない。理性は激しく警鐘を鳴らしている。しかし、欲望はそんな警鐘を打ち消すほど大きく、そして大きな津波となってケイの脳を揺さぶっていた。

ケイは何度も右手でクリトリスを触ってみる。左手は意識していないのにいつの間にか乳首をコリコリといじっていた。オナニー。誰がどう見てもケイはオナニーをしていた。

（オナニーって、こんなにも気持ちのいいものだったのか）

もうケイはオナニーを止めることができなかった。両手の動きは激しくなり、シャワーを浴びながら小さく声を漏らす。その股からは明らかにシャワーのお湯とは違う体液が流れ出ていた。しかし、ケイはオナニーに夢中で自分の身体の変化に気づかない。

意識してか、それとも無意識かはわからないが、ケイが両手でクリトリスの皮を剝く。ピンッと上を向いたゆで卵のような裸のクリトリスが姿を現した。ケイはそれを強くつまんでしまった。

「んんんんんっ！」

加減がわからなかったケイは初めてクリトリスを直に強く触ってしまい、強烈な刺激を無防備に受けてしまった。その衝撃は快楽の防波堤を打ち破り、初めての絶頂という現象をケイにもたらした。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

ケイはシャワーを頭から浴びながらその場に座り込む。尻をついてしばらくは立ち上がれそうもなかった。

（今のが、イクってこと……？　これが、オナニー……？）

ケイは朦朧とする意識の中、開けてはならない快楽の扉を開けてしまったことを実感したのだった。

## 第二章　催眠調教

翌朝、タクミはいつものようにケイと一緒に登校していた。しかし、どうも今日のケイはいつものケイとは違うような気がする。どこか色っぽい。気のせいかもしれないが、タクミはなんとなくそう感じていたのだ。

「昨日は悪かった。夕食を一緒にできなくて」

「えっ？　いや、別に大丈夫だよ。あのあとカナデからケイと一緒に帰ってきたって聞いてたし、バイトが遅くまでかかったんだよね？」

「ああ。しかし、三人で夕食をとるくらいはできたかもしれない」

「いや、無理しなくてもいいよ。食事ならいつでもできるんだから。それよりもバイト、あまり無理しないでね」

「ん、ありがとう。そうするよ」

会話に不自然なところはない。ただやはり細かな動作がいつもよりも女らしいのだ。それがタクミを意識している結果なのだとしたらうれしいことだろう。しかし、ケイはタクミを意識しているわけではなく、昨日のフォレストたちの機械洗脳によってそのような動作を刷り

込まされただけであった。現にケイの色香はタクミだけでなく、道行く人々にまでまき散らされており、通り過ぎる人の視線は確実にケイに集まっていた。

（もしかして、ケイも自分を女の子として意識しだしてきたのかな？）

何も知らないタクミはケイの変化を好ましいものとして認識していた。もしこのままケイが女の子としてタクミと接していけば、それは友人の延長としての恋人ではなく、セックスも視野に入れた付き合いができるかもしれない。タクミも年頃の男なだけあって人並みにはそういうことに興味を持っていたのだ。

（今度、キスくらいはできるかも）

タクミの未来は明るいように思えた。しかし、その未来はすでに奈落の底につながっていることにタクミはまったく気づいていなかった。

学校が終わり、気づくとケイは昨日と同じ街はずれの空き倉庫にやって来ていた。意識した行動ではない。学校が終わってからこの場所に来るまでの記憶がすっぽりと抜け落ちているのだ。

「……私、どうしてここに？」

ここは昨日調べて何もなかったはず。『ＭＧＯ』にもそう報告した。それなのになぜここに来てしまったのか。いくら考えても自分で自分の行動がわからなかった。

「ほう、本当に来たのか。時間ピッタリだ」

「誰だっ！」

誰もいない倉庫の奥からスーツ姿の男が現れた。フォレストだ。しかし、ケイにとっては初対面となる男である。

「昨日は家に帰ってからどうだった？　身体がうずいてしょうがなかっただろう。オナニーくらいはしたんじゃないか？」

「な、何を馬鹿なことを」

ケイは内心動揺していた。なぜこの男は昨日自分がオナニーしたことを知っているのか。何もわからなかったが、ケイはこの男を不審人物として認識した。もしかしたら『ＭＧＯ』にとって敵となる人物なのかもしれない。

「お前は何者だ」

「これは失礼。俺はフォレストというものだ。まあ、ここで自己紹介してもすぐに忘れるだろうがな」

「本当に失礼なやつだ。私はそこまで記憶力悪くないぞ」
「本当にそうかな？　それならなぜ昨日のことを忘れている」
「昨日のこと……？」
ケイは違和感を覚えた。昨日は何もなかったはず……。いや、本当にそうなのだろうか？　本当に何もなかったのか？　確かに記憶では何もなかったはずなのだが、何かがあったような気がしてならなかった。ただ確実に言えることが一つある。
（このフォレストとかいう男、何か知っている）
ケイは鞄を投げ捨てると、瞬時にフォレストの懐に潜り込んだ。ケイの拳はピタリとフォレストの顎の寸前で止まる。
「知っていることをすべて話せ。今度はこの拳を当てるぞ」
「お～、怖い。わかった、わかった。すべて話すさ。でもまあ――」
フォレストがパチンと指を鳴らした瞬間、ケイは糸が切れた操り人形のように膝をついて動かなくなった。
「話してもどうせ覚えてないだろうがね」
フォレストたちは昨日のうちにケイを催眠状態にしていた。その催眠の導入条件が、この指を鳴らすという単純な行為なのである。こう

なってしまえばケイはどうすることもできない。フォレストの操り人形だ。

「さあ、今日は念入りに調教しようか。昨日よりも激しくなるから覚悟しろよ」

ケイはフォレストの言葉が聞こえていないのか、まったく反応しなかった。しかし、その反応のなさがフォレストにとっては催眠の成果を感じさせる反応だったのである。

「ついてこい」

フォレストが倉庫の奥へと向かっていくと、それに続くようにケイも歩き出した。現時点でも簡単な動作なら言いなりになってしまうのだろう。ケイの瞳には意志の光がまったく灯っていなかった。

ケイは昨日と同じように洗脳用の機械に拘束されていた。しかし、一目見て昨日と違うところが一つあった。

「いい眺めだな」

「はい。このために準備させましたからね」

フォレストとバグがケイを眺めながらニヤニヤと笑っている。そのケイは制服を脱がされ、下着姿になっていた。いや、ただの下着姿ではない。ケイが持っている下着に比べて布面積がかなり少なく、大事なところがほとんど隠れていないかなりアダルトな下着だった。乳首とクリトリスがぷっくりと膨らんでいるのもフォレストたちから見ても丸わかりだ。

「まずはこの下着をつけていることを普通のことだと認識するようにしましょう。他にも過激な下着はいっぱい用意しましたからね。家に戻ったら普通の下着は捨てさせてすべて私たちが用意したものにいたします」

「ふっ、明日からは真面目な顔をして制服の下ではこんなエロい下着をつけることになるのか。見ものだな」

「まだまだ調教は続きますよ。今日はフォレスト様にも手伝ってもらいます」

「何をすればいい」

「そうですね。こういうのはどうでしょう」

バグが今日の調教計画をフォレストに伝える。初めは真面目な顔のフォレストだったが、次第にその顔がにやけてきた。

「面白い」

「ありがとうございます。では、しばらくお待ちください」

「ああ、少し別の仕事をしてこよう」

そう言ってフォレストはバグの調教部屋を出ていった。そして数時間後、フォレストが戻ってくるとケイは洗脳装置の拘束から解き放たれていた。

「フォレスト様、お戻りになりましたか」

「拘束を解いて問題ないのか」

「ええ、今は半催眠状態になっております。意識はありますが、夢でも見ているような感覚で今から起こることはまともに覚えていないでしょう」

「だが、深層心理には深く刻み込まれる」

「その通りです」

フォレストはおもむろにケイに近づくと、いきなりその唇を奪った。

「うんっ！」

ケイは驚いたようだが、逃げる様子はない。それを見てフォレストの舌はケイの口の中へと侵入し、口内を蹂躙し始めた。

「う、ううっ、ううんっ」

ケイの舌はフォレストの舌の侵攻を防ごうとしているようだったが、初めてのキスにどうしていいかわからず狼狽する。戦闘に対する訓練は十分に受けているケイだったが、こういう大人の行為の対処法はまったくの素人だった。

「拒絶するな。受け入れろ。そうすれば気持ちよくしてやるぞ」

フォレストはケイの耳にそう囁くと、キスをしながらケイの胸を揉みだした。ケイの顔は急速に赤く染まり、舌の動きも変化する。フォレストの舌を拒絶するような動きが弱々しくなり、むしろフォレストの舌を積極的に受け入れるように絡みついてきたのだ。考えてのことではないだろう。無意識にケイが快楽を求めているのだ。

「うんっ、あんっ、ああんっ」

「下は自分でいじってみろ。昨日オナニーしたんだろう？　それと同じようにクリトリスを触れ。マンコに指を入れてもいいぞ」

ケイはフォレストの指示に素直に従う。催眠状態のケイにとってフォレストの指示は絶対なのだ。それが快楽へとつながると本能でも理解している。

クチュクチュとケイの股間から水音が聞こえてきた。キスの時点でケイは股間を濡らしていたのだ。これがバグの洗脳調教の効果なのだろう。昨日までは何も知らなかった生娘が今ではキスだけで股を濡らす変態へと変貌している。

「乳首も硬くなってるじゃないか」

「あんっ」

フォレストがケイの乳首を潰すようにコリコリすると、ケイは反射的に甘い声を漏らした。オナニーをするケイの手も興奮具合に比例するのか、次第に激しくなる。

「うんっ、あんっ、ああんっ!」

ケイの舌と手の動きが一段と激しくなる。限界が近いのが誰の目にもわかった。

「よーし、イカせてやる。イクときは『イク』と言えよ」

ケイはフォレストの言葉に行動で応えた。舌はフォレストの舌とヘビの交尾のように絡み合い、オナニーは蟹股になっていることすらも気づいていないようで両手を下着の中に突っ込んでいた。

（よし、今だっ！）

フォレストはケイの舌を吸い上げると、ケイの乳首を両手の指先で握りつぶした。ケイは目を白黒させせて限界を突破する。

「い、イクゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥっ！」

絶頂の咆哮は部屋中に響いた。潮を噴いたのか、せっかくの新品の下着がびしょ濡れだった。もはやまともに下着としての機能を果たしていないだろう。

「気持ちよかったか？　俺の言うことを聞いていればもっと気持ちよくなれるぞ」

「もっと、気持ちよく……」

「そうだ。だから俺の指示に従え。俺の言葉に疑問を持つな」

「あ、ああ……」

洗脳は成功だろう。しかし、これがどの程度の深さで洗脳できているかは試してみるしか方法はない。

「お前は『ＭＧＯ』のエージェントだな？」

「ああ……。私は『ＭＧＯ』のエージェントだ」

まずは自分で自分の所属を言わせることに成功した。これだけでも洗脳が十分進行している証拠だった。

「では、お前の上司は誰だ。このあたりにある『ＭＧＯ』の基地を教えろ」

「それは……うううっ！」

ケイは頭を押さえて苦しみだした。フォレストの問いに洗脳されていないケイの精神が拒絶しているのだろう。

「ちっ、まだ完全に洗脳できたわけではないということか」

「まだ２０％前後ってところでございますね」

「完全に洗脳するためにはもっとこいつを快楽に堕としてやる必要があるってことだな」

「さようでございます」

「いいだろう。明日からは更なる調教を進める。バグ、準備しておけ」

「お任せください」

目の前で自分の調教計画を話されているというのに、ケイは何も感じていないようだった。洗脳調教という蜘蛛の糸は日に日にケイを絡みついていくのである。

## 第三章　フェラチオ調教

翌朝、タクミは今日もいつものようにケイと一緒に登校していた。幼なじみで恋人なのだ。ほぼ毎日こうしてケイと一緒に登校している。もはや日常の一部なのである。

（今日のケイも色っぽいな。やっぱり昨日のは見間違いじゃない。きっと僕の行動を待ってるんだよね）

今日の放課後にでもチャンスがあったらキスしてみようかとタクミは覚悟を決めた。そんなことを考えていると少しだけ歩幅が短くなり、ケイに遅れていることに気づいた。

（おっと、いけない）

タクミがケイの隣に並ぼうと走り出そうとした瞬間、強い風が二人の間を通り過ぎた。その風はケイのスカートをまくり上げ、中身をタクミの網膜に焼き付ける。それは昨日フォレストがケイに渡したエッチで過激な下着だった。

「!?!?!?!?!?!?」

タクミは動揺して鞄を落としてしまう。それに気づいたケイは立ち止まって振り返った。

「どうした、タクミ。何かあったのか?」

「えっ? い、いや、何でも……何でもないよ」

まさか今見たことが現実とは思えない。見間違いだと思いたい。しかし、あまりにも衝撃的すぎて今でもはっきりと思い出せるくらいにそのエッチな下着は脳裏に焼き付いているのだ。とても見間違いだとは思えなかった。

しかし、「ケイって今エッチな下着を穿いてるの?」と訊けるわけもない。どうしてそんな過激な下着を穿いているのか、タクミは悶々とし続けなければならなかった。

そんなタクミに更なる追い打ちがやってきた。

「やあ、天花寺くん。こんなところで会うとは偶然だね」

「えっ?」

ケイが振り返ると、そこにいたのはフォレストだった。昨日までの記憶がしっかりと残っているのならこの場で何か対処しただろう。し

かし、洗脳調教を受けたケイにはフォレストが敵だという認識ができなかった。それだけではない。

「ケイ、この人は?」

「ああ、この人は私のバイト先の上司で山田公也（やまだ　きみや）さんだ。山田さん、おはようございます。こっちは私の友人で海老原タクミです」

「どうも、海老原くん。山田です。よろしく」

「よ、よろしくお願いします」

タクミは急に現れた山田と名乗る人物に動揺した。ケイはその性格上タクミとカナデ以外の人にはなかなか心を開かないのだが、山田に対してはすでにかなりの親しみを感じているようだった。同じ職場で働くということはそこまで親密度を上げるというのか、とタクミは少々苦い気持ちになった。

「若い男女が仲良く登校か。もしかして二人は恋人なのかな?」

「はい、そうです」

ケイがはっきりとタクミのことを恋人だと言ってくれる。本来なら
タクミが言うべきなのかもしれないが、タクミにはそんなことを初対
面の人に対して言う勇気はなかった。
「そうか。青春だね」
フォレストは爽やかな青年上司を装って笑顔になる。タクミもその
笑顔に騙され、フォレストのことを悪い人だとは思わなかった。
「ああ、それと天花寺くん。悪いんだけど今日もバイトに入れるかな？
急にバイトを辞めてしまった子がいてね。当分忙しくなりそうなんだ
よ」
「はい。問題ありません。その子の代わりに当分私がバイトに入りま
す」
「悪いね。ありがとう」
タクミは今の会話を聞いて少しだけ不機嫌になる。ケイがバイトば
かりやっているとタクミとの時間が無くなってしまうではないか。ケ
イが決めたことなので口出しできないが、せめてもう少し迷うくらい
はしてほしかったなとタクミは思った。
「海老原くん、悪いね。君の彼女をしばらく借りることになるよ」

「い、いえ、大丈夫です。仕事なら仕方ありません」

タクミは心にもないことを言う。本当ならケイにバイトなんてやってほしくなかった。しかし、ケイは両親と離れて一人暮らしなのだ。生活費は仕送りで送られてきているようだが、金銭的な余裕はないだろう。ケイのバイトに口出しをできる立場にタクミはいなかった。

「これ以上引き留めては二人とも遅刻してしまうね。呼び止めて悪かったよ」

「いえ」

「だ、大丈夫です」

「では、学校がんばってくれ」

フォレストはそう言うと二人とは反対方向へと歩き去っていった。タクミはフォレストに悪い印象は持たなかったが、何とも言えないもやもやとした気持ちが心の片隅に残ったことを意識する。

「タクミ、どうした?」

「な、なんでもないよ」

これは嫉妬なのかなとタクミは自分の自信のなさが嫌になる。タクミはケイの恋人なのだ。ケイが浮気をするわけがない。自分のほうが

有利な立場にあるというのに、嫉妬するなんて馬鹿げている。タクミはそんなことを思いながらも、胸のもやもやはまったく晴れてくれそうにはなかったのだった。

その日の午後もケイは学校が終わると街はずれの空き倉庫の地下へと訪れていた。もはやここに来るのが普通のことと認識させられているようだ。

「この女もずいぶんと快楽に対する抵抗が薄れてきました。ここらでもう少し従順になるような調教を施しましょうか」

「どうするんだ」

「こういうのはいかがでしょう」

バグの提案を聞き、フォレストは思わず口元が緩む。

「面白い。やってみようじゃないか」

「ありがとうございます。では、早速。おい、ケイ。その場に跪け」

バグの高圧的な指示にもケイは従順に従う。この時点である程度命令に従うのだが、これはまだ意識のない人形としての従順さだ。フォ

レストたちが求めているのは自分で考え、自分で行動できる従順な手駒なのだ。それにはまだまだ調教が必要だった。

「では意識を少し戻します」

バグが指を鳴らすと、ケイの瞳にわずかにだが光が戻った。

「……えっ、ここは？」

「気づいたか」

「お前は……っ！」

この数日のことを思い出し、ケイはすぐさまフォレストに飛びかかろうとする。しかし、意識は戻ったが身体の自由は戻っていないらしく。指先一つまともに動かすことができない。

「無駄だ。お前の身体は俺たちがコントロールしている」

「悪党め。お前たちが『アラクラン』の下部組織というのは間違いなさそうだな」

「ああ、そうだ。だが、その悪党の『アラクラン』にお前も協力することになるんだぞ」

「何を馬鹿なことを。私は『アラクラン』なんかに協力しない」

「今はそうかもな。だが、これからはどうなるかわからないぞ」

フォレストはそう言うとおもむろにズボンのジッパーを下ろし、平均的な成人男性よりも巨大なペニスを取り出した。

「な、何をしているっ！？」

「その反応、男のペニスを見るのは初めてか？」

「そ、そんなわけないだろう」

実際ケイは男のペニスを見るのは初めてではない。子供の頃タクミのものを何度か見たことがある。しかし、フォレストのペニスはタクミのものとは似ても似つかないほど大きさに違いがあった。

（大きい……。私が見た時のタクミはまだ子供だったからなのか？いや、それにしても大人になってタクミのものがここまで大きくなるものだろうか）

情事に疎いケイは驚きすぎてフォレストの巨大なペニスから目が離せなかった。

「まあ、どちらでもいいさ。ケイ、こいつを舐めろ」

「なっ！」

あまりの命令にケイの瞳が大きく開かれる。知識としてそういう行為があるというのは知っていたが、実際にやるとなると忌避したくな

るものだ。それも愛するタクミのものならまだしも、相手がフォレストというのだからなおさらである。

「嫌に決まってるだろうっ！」

「そうかな？　だったらなぜお前の顔が俺のペニスに近づいている」

「えっ？」

フォレストの言う通り、ケイの顔は少しずつフォレストのペニスに近づいていっていた。ケイとしては全力で拒否しようとしているのだが、身体が言うことをきかない。ついにはケイの舌が口から伸び、フォレストのペニスの先をチロリと舐めた。

（わ、私は何をしているっ！？　どうしてこんなやつのペニスなんか舐めているんだっ！？）

ケイは自分で自分の行動の意味が分からない。すぐに顔を離したかったのだが、舌はケイの意志に反して何度もフォレストのペニスを舐めている。

「いいぞ。口は反抗的だが、舌は従順じゃないか。本当は俺のペニスを舐めたくて仕方なかったんだろう」

（そんなわけないっ！）

反論しようにもケイの舌はペニスを舐めるのに忙しい。苦い味がケイの口の中に広がっていった。

（まずい……っ！　こんなもの舐めさせるなんて頭おかしいんじゃないか）

フォレストはケイの表情を見てニヤニヤと笑っている。ケイがペニスの味を快く思っていないことは百も承知だ。しかし、フォレストたちの調教はここからが本番なのだ。

バグがケイの後ろでパチンッと指を鳴らす。

「どうだ、そろそろペニスがおいしく感じるようになってきただろう」

（何を馬鹿なことを……。こんなものがおいしく感じるはずが――）

ケイはフォレストを睨みつけて反論しようとしたその瞬間――自分の舌先の変化に驚いた。

（えっ？　ま、まずくない……？　味が変わったのか？　いや、味は苦いままだ。しかし、先ほどのような不快な味ではない気がする）

ケイは味の変化に動揺した。先ほどまでは嫌々と舐めていたペニスだったのに、今では少しだけおいしく感じてしまうのだからどうしようもない。

「淫乱な女は慣れてくるとペニスの味が癖になるらしいぞ。まあ、お前には関係ない話か。『ＭＧＯ』のエージェントが淫乱な変態なわけないからな」

「あ、当り前だっ！」

反論したケイだったが、舌は先ほどよりも機敏な動きでフォレストのペニスを舐め始めている。まるでもっとこのペニスを味わわせろと催促しているような動きだった。

「いい動きじゃないか。竿の裏側も舐めてみろ。きっと気に入るはずだ」

「何を馬鹿なことを……」

不満を漏らしつつもケイは言われた通りにペニスの裏筋を舐める。太い尿道の感触が舌を通してケイの脳みそまで伝わった。

（変な味だ……。でも、確かに悪い味じゃないかもしれない）

ケイはフォレストのペニスを舐めることに夢中になっていた。先ほどまで必死に拒絶しようとしていた気持ちはどこかに行ってしまったようで、今はどうすればもっとこの味を絞り出せるかという研究者にも似た気持ちになっている。

（ここはどんな味がするんだろうか）

ケイはフォレストに言われてもいないのに陰嚢を舐め始めた。これは洗脳による行動ではない。ケイの意志が起こした行動なのだ。調教によってケイの意識が変化し始めているという証拠かもしれない。

「ほう、なかなか目の付け所がいいじゃないか。そこも男の大事なところだ。丹念に舐めろよ」

（こいつに褒められてもうれしくないな）

心の中では悪態をつくが、ケイの舌は踊るように陰嚢を嘗め回す。ペニスの先、陰茎、陰嚢――どこも少しだけ味が変わっており、どこもケイの舌を満足させるような味だった。

（悔しいが、こいつのペニスはおいしいかもしれない。私は、淫乱な変態なのか……？）

ケイは自分で自分のことが信じられなくなる。今までは厳格な正義の味方として働いていたつもりだったが、今の行動は強制されているとしても自分の気持ちまでは変わっていないと思っている。ペニスの味をおいしいと感じることがケイにとってとても悪いことのように思

えてしまっていた。しかし、だからといって舌の動きが鈍ることはない。

「いいぞ。最後にペニスをその口で頬張ってみろ。口全体で味わうんだ」

（口全体で、この味を……）

ケイは一瞬逡巡したが、すぐにフォレストの命令通りにペニスを頬張った。その瞬間、何とも言えない甘美な刺激がケイの口全体に広がった。

（な、なんだ、これは……）

「顔を動かせ。歯を立てないようにしてペニスをしごくんだ」

ケイがフォレストの指示通りにフェラチオを開始する。ジュブジュブという唾液音が部屋の中に広がった。

（動けば動くほど味が広がっていく。搾れば搾るほど味が染み出てくるようだ）

フォレストは満足そうにケイのフェラチオを見下ろしている。洗脳によって味覚を少し変えてやったが、ここまでフェラチオに積極的に

なるとは思わなかった。淫乱な変態はペニスの味が癖になると適当なことを言ったが、案外それは本当のことかもしれないと密かに思った。

「まだまだ拙いが、筋はいい。鍛えればものになりそうだ」

「それでは今日からオナニーに追加してディルドーを使ったフェラチオも日課に加えておきましょう」

「それはいいな。フェラをしながらオナニーをさせることにしよう。こいつは面白いことになるぞ」

ケイはフェラチオに夢中で二人の会話を聞いていなかった。一度ここまで夢中にさせてしまえば勝手にフェラチオの練習をするかもしれない。それほどケイはフェラチオに意識を集中させていたのだ。

「ああ、そろそろイキそうだ。ケイ、男がイクとこの先から何が出るか知ってるよな?」

（まさか、精液……っ!?）

「その顔、知ってるようだな。それなのに動きを止めないということは精液を飲みたいんだな?」

（そんなわけないっ！　そんなわけないのに……、どうして私の口は止まってくれないんだ）

ケイの意志に反してフェラチオは速度を増していく。まるで早くフォレストの精液を飲みたいと言っているかのようだった。

「精子はまた違った味でうまいらしいぞ。まあ、俺は飲みたくないがな。変態のお前ならきっと気に入るはずだ」

（勝手なことを……っ！　で、でも、もしかしたら……）

すでにケイの口の中には先走り汁が漏れ出してきている。その先走り汁だけでもケイの舌は歓喜の声をあげているのだ。もしこれが濃厚な精液になったらどうなるのか。考えるだけでも恐ろしかった。

（飲んじゃいけない。味わっちゃいけない。きっと戻れなくなる）

ケイは必死にフォレストから離れようとした。しかし、どれだけ強く思っても口はフォレストのペニスから離れようとしてくれない。それどころからタコの吸盤のように引っ付いて離れないのだ。

（どうして……。どうして私の口は私の言うことを聞いてくれないっ！）

「さあ、出すぞ。存分に味わえっ！」

びゅるるるっ！

「んっ！　んんんんんっ！」

ケイは口の中で精液を受け止めた。命令されたわけでもないのに一滴もこぼすまいと飲み干していく。その味はフォレストの言う通り舌先で舐めたペニスよりも、口の中で味わった先走り汁よりも濃厚で甘美な味だった。

（だ、ダメだ……。これは、癖になる……）

ケイの顔は自然と紅潮してとろけきっていた。おそらくマンコからは愛液が溢れ出してパンツを濡らしていることだろう。

「ふぅ、初めてにしてはなかなかよかったぞ」

フォレストはケイの口からペニスを抜くとズボンの中にしまい込んだ。

「あっ」

その様子をケイは残念そうに見つめている。まだ精液を味わいたかったのだろう。フォレストもそれに気づいているが、今はまだその時ではないと考え知らん顔をした。今ケイに必要なのは快楽による満足感よりも飢餓感を育てることなのだ。

「初めてのフェラはどうだった?」

「……さ、最悪だ」

「そうか。それならもうフェラはやめておくか」

「えっ」

もちろんフォレストの嘘なのだが、ケイはそんな嘘を見抜けないほどフェラチオに夢中になっていた。その様子を見てフォレストとバグはほくそ笑む。

「そんな顔をするな。お前がフェラ好きになったことはわかってる。今度からお前が望めばいくらでも舐めさせてやるよ」

「な、何を馬鹿なことを……」

「ふふふっ、いつかその口も素直になるだろう」

その日は遠くない。フォレストは今回の調教でそれを確信したのだった。

その日の夜。ケイはここ数日で日課になっているオナニーにふけっていた。しかし、何か物足りない。

（刺激が、足りないのか……？）

ケイはいつもより強く乳首をいじってみたり、クリトリスを強くつまんでみた。それだけでもかなりの刺激がケイの脳みそを襲っているのだが、それでもやはり満足のいくものではなかった。

（なんだ、何が足りない）

ケイがオナニーの研究をしていると、玄関のチャイムが鳴った。こんな夜遅くに誰だろうとオナニーを邪魔された不快感を隠そうともせずケイは玄関へと向かう。衣服は少し乱れていたが、もうそんなことはあまり気にならなかった。早く用件を済ませてオナニーを再開したかったのだ。

「宅配です」

「宅配？」

ケイはネットなどで何かを頼んだ記憶はない。しかし、確かにあて名は天花寺ケイとなっていた。送り主は山田公也となっている。

（山田公也……。ああ、山田さんか）

ケイの洗脳された記憶ではフォレストの偽名――山田公也はケイの上司ということになっていた。その上司からの荷物とあっては受け取

らないわけにはいかないだろう。ケイはサインをして荷物を受け取った。

「中身は何だ?」

ケイは早速梱包を解いて中身を確認してみた。するとそこには、何種類ものテカテカと輝くペニスをかたどった棒――ディルドーが入っていた。ケイは一瞬それが何かわからずキョトンとする。

「これは、なんだろう……。でも、何か卑猥な感じがするな」

ケイはディルドーを手に取ってみてそれがペニスをかたどったものであることに気づいた。瞬時に顔が真っ赤に染まるが、それを手放そうとはしない。

(もし、これを使ってオナニーをしたら気持ちよくなれるのか?)

ケイは無性にこのディルドーを嘗め回したくなった。このディルドーの形はどこかで見たことがある。舐めたらおいしい気がする。それはケイがフォレストに刷り込まされたフェラチオの記憶だった。

ケイは自室に戻り、早速オナニーの続きをする。しかし、今度はフォレストから送られてきたディルドーを舐めながらだ。

「んんっ、あんっ、はむっ」

ディルドーを舐めても味はしなかった。しかし、なぜだろう。ただペニスをかたどった棒を舐めているだけだというのに、先ほどまでのオナニーでは味わえなかった満足感が湧き出てくる。

（このディルドー、大きい……。こんなペニスを舐めたらどんな味がするんだろうか）

実際はすでに舐めたことがある。そのディルドーはフォレストのペニスをもとにして作られたものであるため、そのディルドーに慣れるということはフォレストのペニスに慣れるということなのだ。フォレストたちはケイを一人にしても調教をつづけているのである。

ケイはディルドーを舐めながら乳首をつまんだ。

「はふっ！」

先ほどまでとは違う甘美な刺激がケイの全身を駆け巡る。ただ口にディルドーを咥えただけだというのに、この変化は何だろう。これほどまでにこのディルドーはケイのオナニーを変えてくれるというのか。

（これは、すごい……）

ケイはディルドーを頬張った。無機質な味なのに、なぜかとても美味しく感じられる。もっと気持ちよくなるためにはどうすればいいの

か。このディルドーを本物のペニスのように扱えばいい。ペニスをもっと気持ちよくすれば、ケイのオナニーも気持ちよくなる。そんな気がした。

「じゅる、じゅるじゅるじゅる。はむむっ」

ケイはものすごい勢いでディルドーを嘗め回した。反対側の手では忙しく乳首やクリトリスをいじっている。たまにマンコの周りをなぞるようにして刺激を加えるようにしたのはオナニー研究の成果だろうか。

（ああ、いい。これはいい。これはすぐにイケそうだ）

限界が近づいていることを知ったケイはさらにスピードを速める。両手と舌の動きが激しくなった。そして、その時は来る。

「ん、んんんんんっ！」

絶頂とともに潮を噴く。ここ数日でケイのオナニーは潮を噴くことが癖になってしまっているようだった。それが最高に気持ちいい証であることもケイは気づいているらしく、部屋が汚れるのも厭わないで潮を噴き続けている。

「もっと、もっとオナニーしたい」

この程度ではまだまだケイのオナニーは終わらない。この日もケイはオナニーで夜を更けさせていくのだった。

## 第四章　痴漢調教

朝になり登校の時間がやってくる。タクミは今日のケイの様子を見てまともに寝ていないことがすぐにわかった。目の下に隈があり、いつもならしっかりと着こなしている制服もだらしなく乱れている。

「……ねえ、ケイ。大丈夫？　最近ちゃんと寝てるの？」

「ああ、大丈夫だ……。しっかり眠っている」

もちろんこれはタクミを心配させないようについた嘘である。ケイは最近オナニーに夢中になりすぎてまともに寝ていないのだ。体力の消費も激しいはずなのに、遅刻せずに学校に行く姿はまさしく優等生と言うにふさわしいだろう。

しかし、そんなケイの内情を知らないタクミは増えたケイのバイト――実際はフォレストの洗脳調教――が原因だと思っていた。

「バイト、今からでも減らせないの？　あまり無茶してたら身体が持たないよ」

「タクミ、やさしいな。でも本当に大丈夫だ。私は心配ない」

「う～ん、そこまで言うなら……」

本当はもっと強く止めたかったのだが、タクミにケイの意志を翻せるほどの言葉はなかった。もともと昔からケイの後についていくような性格だったのだ。ケイがタクミの行動を決定することはあっても、タクミがケイの行動を左右することは稀だった。

（でも、今日のケイは一段と……）

疲れた様子でもケイの美しさは変わらなかった。それどころか妙な艶めかしさがあってタクミは不覚にもドキドキしてしまう。

（こんなケイを見るは初めてかも）

いつもケイは凛々しく頼もしかった。風邪をひいたときでもタクミより元気があるくらいだったのだ。それだけタクミが弱々しかったというのもあるだろう。

しかし、この艶めかしさもケイが毎日オナニーをしているせいと知ったらどう思うだろうか。ケイは毎日朝方までオナニーをしているせいで女の欲情した匂いを振りまいているのだ。もともとの色気と相まってタクミ以外の男が寄り付かないのが不思議なくらいである。

そんなケイの色気に押され、タクミは普段とは違う思考になってしまったようだ。

「ね、ねえ。今度バイトが休みの時にさ、どこか遠くに行かない？」
「ん？　それはデートのお誘いというやつか？」
「う、うん。まあ、そんな感じ」
いつもならケイのほうがデートに誘うことが多かったのだが、今日はタクミのほうから誘ってみた。タクミが誘うデートと言えば一緒に登下校する程度のデートとも言えないものだったのだが、これが初めての正式なデートのお誘いかもしれない。
「今度の休みか……。ああ、いいだろう。いつになるかわからないが、しっかりと覚えておく」
「本当！？　よかったぁ。断られたらどうしようかと……」
「私がタクミとのデートを断るはずないだろう」
ケイはそう言うとスマホのメモにしっかりと『バイトの休みにタクミとデート』と打ち込んだ。本来のタクミならこれだけ疲れているケイを見ればバイトの休みの日くらいゆっくり休んでもらいたいと思ったことだろう。しかし、ケイの色香に当てられた今のタクミには、ケイを一人占めしたいという独占欲で頭がいっぱいだった。
「楽しみだなぁ、デート」

「ああ、まったくだ」

ケイもタクミとのデートはうれしくないはずがない。しかし、このデートすらもフォレストの調教に利用されることに、二人はまだ気づいていなかった。

週末になり、運よくケイのバイトは休みになった。もちろんフォレストがそうさせたのだが、それには理由があってのことだった。

「水族館かぁ。久しぶりかも」

「私が決めてしまったのだが、大丈夫だったか？　もしかしてタクミにも行きたい場所があったのではないか？」

「ううん。大丈夫。ケイが行きたい場所が僕の行きたい場所だから」

「そうか」

ケイたちのデートは少し遠くの水族館に行くことになった。もともとは近くで遊ぶ予定だったが、昨日になってケイが行きたい場所があると言ってきたのだ。

（しかし、どうして私はあんな遠くの水族館に行きたくなったんだ？タクミと一緒ならもっと近くでも不満はないはずなのに）

しかし行きたくなったのだからしょうがないとケイはすぐにその思考を頭の隅に追いやった。

電車が来た。ここからは電車に長時間乗ることになる。時間帯的にもかなり混んでいるはずだ。

「タクミ、はぐれないようにな」

「う、うん」

ケイはタクミの手を握って電車に乗り込んだ。中はすでに人でいっぱいだった。人と人の間に二人は入り込む。水族館がある駅に着くまで当分はこの状態が続くだろう。

「タクミ、大丈夫か?」

「な、何とか。でも、これじゃ座れないね」

「仕方ないさ」

電車が出発すると人の波に押しつぶされそうになる。タクミはかなり辛そうだったが、ケイは普段から鍛えているだけあり、満員電車でもうまくバランスをとっていた。

(タクミだけでも座らせてあげたいな。どこかに席は空いてないだろうか)

ケイがあたりを見回していると、不意に誰かの手が尻に触れた感触があった。

（……満員電車だからな。手ぐらい触れるだろう）

こんな経験は一度や二度ではない。満員電車を経験したことがある人ならばこの程度のことでいちいち騒ぎ立てていたらやっていけないことは知っていた。

ムニュ。

だが、それと同じように偶然手が触れただけと痴漢が意識的に触れた違いもケイのような女性はよく知っていた。

（まいったな。これは完全に痴漢だ。タクミとデートだというのに、間の悪いことだ）

痴漢を駅員に突き出すとなると時間をとられてしまう。しかし、ここで痴漢を見逃してされるがままになるというのも正義感の強いケイとしてはあり得ないことだった。もしここでこの痴漢を見逃せば他の女性にも被害が出るかもしれない。そう考えると今ここで捕まえるのがケイのとるべき行動だった。

（次に触ってきた瞬間、捕える）

ケイが痴漢を捕えようと身構えた瞬間、耳元でパチンッという指を鳴らす音が聞こえた。

「……っ！」

その瞬間、ケイの身体は石像になったかのように動かなくなってしまう。痴漢を捕まえようとした手も硬直して何もできなくなってしまった。それがわかっているのか、痴漢は先ほどよりもさらに強くケイの尻を揉んできた。

（どうして……っ！）

「どうして身体が動かなくなったのか、不思議か？」

ケイの耳元で誰かが囁いた。ケイはこの声を知っている。

「山田、さん……？」

意外な人物だったのか、ケイはタクミに聞こえないよう小声で驚きの声を漏らした。

「おっと、記憶を戻してなかったか。正気に戻してやったほうが面白いだろう」

フォレストはもう一度ケイの耳元で指をパチンッと鳴らした。するとケイの思考は見る見るうちにクリアになり、今まで行われてきた調教の数々を思い出す。

「貴様、フォレスト……っ！」

「健気だな。大声で助けを呼べばお前だけは助かるかもしれないというのに」

「その代わり周りの一般人をどうするつもりだ？」

「まあ、何人かは怪我ではすまないかもな。ああ、その中にお前の恋人も含まれる可能性は十分にあるぞ」

これは脅しである。動けないケイに対して声を出すなと言っているのだ。この満員電車でこれからケイの身体を蹂躙するつもりなのだろう。

「卑怯者……っ！」

「それは俺たちにとって褒め言葉だぞっと」

「んっ！」

フォレストは大胆にも服の上からケイの胸を揉みしだいた。普段からフォレストに調教され、自分でもオナニーをしているケイのおっぱいはすでに性器として完成されようとしている。

「声を出すなよ。まあ、俺としては声を出してもらってもそれはそれで面白いが、お前は大変なことになるだろうなぁ」

ケイはフォレストを睨みつけようとするも、先ほどからの痴漢行為でケイは発情し始めていた。これが他の痴漢だったらまだ耐えられたかもしれないが、今までさんざん調教されてきたフォレストの手というのが厄介だった。

（駅までだ。目的の駅まで着けばこれも終わる）

終わりがあるというのはケイにとって希望だった。今までもフォレストには調教されてきた。しかし今回はこんな満員電車なのだ。いつもよりひどいことはされないだろうと高を括っていた。

フォレストは服の中に手を入れた。直にケイの肌を触ろうというのだろう。

（こいつ……っ！）

拒絶したかったが、洗脳の影響でケイの身体はうまく動かない。フォレストの手は直にケイの胸を触れ、反対の手はスカートの下から尻を揉んでいた。

「んっ！」

直に触れられた刺激でわずかに声が漏れる。それを不幸にもタクミに聞かれていた。

「ケイ、大丈夫？」

「あ、ああ。何でもない。ちょっとバランスを崩しただけだ」

「そう？　それならいいんだけど」

ケイの頬はわずかに紅潮していたのだが、タクミは気づかなかったようだ。ここに来てケイはフォレストの狙いがわかったような気がした。ただケイに快楽を与えるだけでなく、こういう極限状態で調教することによって羞恥心をスパイスにしようとしているのだ。何とも悪趣味なことである。

（絶対、タクミにはバレたらいけない）

ケイは気合を入れて歯を食いしばった。

「そんなに力むな。可愛い顔が台無しだぞ」

フォレストはケイの意気込みを嘲笑うかのように、太い指をケイの股間の割れ目に入れた。下着などあってないようなものなのだ。そんな下着を穿いている時点で痴漢される準備は万端だったと言える。

（んんっ！　そんな、指を入れるなんて）

今まで自分でも入れたことのない部分なのだ。それをこんな状況で初めて入れられるとは思いもしなかった。しかもそれが気持ちいいと感じてしまったのだからケイの頭はさらに混乱する。

フォレストはケイの胸を揉みながら乳首も責める。ケイのオナニーのやり方と同じなのだが、ケイはなぜフォレストが自分のオナニーと同じ責め方をしているのか不思議でならなかった。もちろんそのオナニーのやり方を洗脳装置でケイに刷り込んだのがフォレストとバグだからである。しかし、そのことをケイが知ることはなかった。

股間のほうは胸よりもさらに問題だった。今まで刺激されたことのないマンコの中にまで指が侵入してきたのだ。新たな快感にケイの足は早くも震えはじめていた。

「そんな調子で最後まで持つのか？　ほら、こんなにも濡れてるぞ」

フォレストはケイに見せつけるようにマンコに入れた指を差し出した。フォレストの指はまるで別の生き物化のようにヌラヌラと光って濡れていた。これが自分の陰部から流れ出た体液であると認めたくない。ケイは思わず目をそらした。

「ダメだ、よく見ろ」

フォレストは指を鳴らしてケイに指示を与える。ケイは自分の意志とは無関係にフォレストの言葉に従ってしまっていた。じっと見てみるとその卑猥さがよくわかる。

（やめろっ！　こんなものを見せるなっ！）

「今からこいつをもっと吐き出させてやるからな。覚悟しろよ」

フォレストは再び胸とマンコの責めに戻った。ケイは声をあげないように我慢するのに必死だ。何度か途中の駅について人が入れ替わったが、フォレストの痴漢行為に気づく人はいなかった。

（こいつ、なんでこんなにもうまいんだ……。すごく気持ちいい……）

ケイは周りに人がいなかったら卑猥な叫び声をあげていたことだろう。いや、今でもその危険性は十分にある。強固な意志で無理やり抑え込んでいるのだ。それがいつ崩壊するかは時間の問題だった。

「声を出していいんだぞ？　ほら、お前の彼氏に聞かせてやれ」
「あんっ！」
フォレストは強く乳首をつまみ上げ、膣壁をこするようにしてかき回した。股間から大量の愛液が車内に飛び散る。
ケイはついにバランスを崩して前にいたタクミに寄りかかった。
「だ、大丈夫！？」
「あ、ああ。すまない。大丈夫だ」
身体がうまく動かないのですぐに離れることもできない。それなのにフォレストは痴漢行為をそのまま続けている。
「んんっ！」
「ケイ？　やっぱり体調が悪そうだけど……」
「し、心配するな。ちょっと人の多さに当てられただけだ。目的地に着いたらすぐに治る」
「そう？」
タクミはどこか釈然としなかったが、ケイがあまりにも色っぽくタクミに倒れ掛かったためにタクミもケイを直視できなかった。実はタクミの股間も勃起しており、それをケイに悟られたくないと必死に隠

しているのだ。そのためにケイの一番近くにいながらケイの異常に気づけなかった。

「馬鹿な男だな。自分の彼女が痴漢に遭ってるというのに気づかないとは」

「くっ、くぅ……。た、タクミを馬鹿にするな……」

ようやく絞り出した声が蚊の鳴くような響きだった。フォレストにも聞こえたかどうかわからない。しかし、フォレストはニヤリと笑って責めをよりいっそう激しくした。

「んん……っ！」

ビチャビチャと愛液があふれ出てくる。もし電車の走行音がなかったら周りの人たちもすぐにこの異常を気づいていただろう。そしてケイの様子からすると限界も近いようだった。

「喜べ。今日は膣でイかせてやる」

「な、何を……」

フォレストは指をより深く膣の中に潜り込ませた。ガタンッと電車が揺れる。その衝撃でケイの膣壁は大きくこすり削られた。

「〜〜〜〜〜っ！」

声にならない声が車内に響く。しかし、フォレスト以外にそれに気づいた者はいなかった。タクミですら勃起を隠すために意識を別のことに集中していたのだ。

「いっぱい出たな。ほら」

フォレストは再び濡れた手をケイに見せる。しかし、ケイは反抗する気力を奪われており、息を粗くするだけで精一杯だった。

「目的地まではまだまだあるぞ。さあ、最後まで耐えられるかな?」

（ああ、私、もう……）

もうこの男からは逃げられない。ケイはおっぱいとマンコをいじられながら深い闇の中に沈んでいった。

体験版はここまでになります。

## あとがき

本作品の感想や誤字脱字の報告などは私の支援サイトであるCi-enまでよろしくお願いします。

（https://ci-en.dlsite.com/creator/16754）

今回は本作品体験版をダウンロードしていただいてありがとうございました。

三日月鳥